

広報たかつき

知る 広がる 好きになる

# TAKATSUKI

Days

令和7年

3

No.1444



未来へ続く  
将棋のまち

今月の高槻な人

桐山清澄さん

日本将棋連盟棋士・九段  
高槻市文化スポーツ振興事業団・理事長

## PICK UP

- 10 「好きなこと」で地域貢献しよう
- 31 高槻市少年少女合唱団
- 38 セーフティボランティア
- 39 し尿収集日程



TAKATSUKI NA HITO

# 高槻な人

## 桐山清澄 さん

日本将棋連盟棋士・九段  
高槻市文化スポーツ振興事業団・理事長



未来へ続く  
将棋のまち

50年以上現役棋士として活躍した桐山さんは高槻市在住。昨年末にオープンした「関西将棋会館」の高槻移転でも橋渡し役に。高槻市文化スポーツ振興事業団理事長の立場から、将棋をはじめとした高槻の文化発展の現在について聞きました。



令和4年に現役を引退した後の生活。

「タイトル戦の立ち会いをすることも多く、原稿を書いたり、日本将棋連盟出題の『桐山清澄九段の懸賞次の一手』を作ったり、イベントの指導対局に行ったりしています」と桐山さん。



ひらめきは盤の上だけではなく頭の中でも。

暮らしの中で将棋のことを考える時間が多いという桐山さん。「盤に向かわなくても、将棋は頭の中でする。電車で乗っている時などに何気なくひらめくことも多いですね」



パソコンを使って、将棋を勉強。

「今は、将棋盤を使わずにパソコンを使うことが多いですね」と桐山さん。パソコンを見ながら将棋盤で実際に駒を動かすこともあるそうです。



4つのタイトルは高槻市で獲得。

高槻市で暮らし始めてから、棋王を1期、棋聖を3期、計4つのタイトルを獲得しました。100年を超える日本将棋連盟の歴史の中でも、複数のタイトルを獲得したことのある棋士は限られています。

TAKATSUKI NA HITO





未来へ続く  
将棋のまち

TAKATSUKI NA HITO

# 高槻な人

## 桐山清澄さん

日本将棋連盟棋士・九段  
高槻市文化スポーツ振興事業団・理事長

### 関西将棋会館が 高槻へ移転する橋渡し。

—長く棋士として活躍し、令和4年に引退。現在は高槻市文化スポーツ振興事業団理事長を務めていらっしゃいますが、いつ就任されたのでしょうか？  
「平成30年です。最初はそんな大役が務まるのか不安はありましたけど、将棋も文化ですし、やってみようと思ってお受けいたしました」

—今高槻は将棋のまちとして盛り上がっています。それも含めて文化活動の状況はいかがですか？  
「令和5年にできた[高槻城公園芸術文化劇場南館]は、一番大きい1,500人規模のトリシマホールのほか、2つのホールと中小のスタジオが10室あり、開館以降、さまざまな方にご利用いただいています。特に、トリシマホールについては、出演してくださった演奏家の方に、木の壁が生み出す音響がやわらかく響き

がいいと好評をいただいていますので、これからもどんどん魅力ある催しをやっていきたいですね」

—そして昨年末には、ついに[関西将棋会館]が高槻にやってきました。高槻在住の棋士として、理事長として、桐山さんが市と日本将棋連盟との橋渡しをされたと聞いています。移転の話はいつくらいから動きがあったのでしょうか。  
「最初に市長からお話をいただいたのは、理事長に就任してすぐの頃。将棋連盟は前の大阪市・福島区にあった会館が老朽

昭和22年 1947年	奈良県吉野郡下市町で生まれる。
昭和25年 1950年	3歳の頃に将棋を指し始める。
昭和32年 1957年	9歳で東京の升田幸三 実力制第四代名人の内弟子となる。
昭和33年 1958年	大阪の増田敏二 六段に師事する。
昭和41年 1966年	四段に昇段し、プロ棋士となる。
昭和51年 1976年	昭和53年まで、日本将棋連盟理事を務める。
昭和56年 1981年	大阪市内から高槻市日吉台に引っ越し。
昭和59年 1984年	初めてのタイトル・棋王を獲得する。九段に昇段。
昭和61年 1986年	棋聖戦でタイトルを獲得し、3期保持する。
平成30年 2018年	高槻市文化振興事業団(現高槻市文化スポーツ振興事業団)の理事長に就任。
令和4年 2022年	棋士として現役を引退する。

化してきて、ゆくゆくは、建て替えも考えなくてはいけなかったのに、高槻への移転の話はタイミングがすごく良かったんですよ。建て替えるとしても大阪市内だと思ってましたから、この話を初めて聞いた時はびっくりしました。でもよくよく考えたら、大阪からも東京からも、来るのに交通の便がいい。東京からは京都で1回乗り換えるだけでいいので、特に便利なんです。私自身、高槻に住んでそのことを実感していましたから、当時の将棋連盟会長に、ちょっと検討してもらえませんかということをお話ししました。東京の棋士も、やはり便利になるということもありすごく好意的で、話が進んでいきましたね」

—そしていよいよ令和6年12月3日に高槻で[関西将棋会館]がオープンします。この時のお気持ちは？  
「11月の開館記念式典でテープカットをさせていただきましたが、非常に光栄に感じました。新会館には、最新のシステムや設備が備わっています。私が棋士になった時の会館は、大阪市・阿倍野区にあった古い普通の日本家屋だったので、その時のことを思うと、夢のようです(笑)」

### 棋士になるチャンスくれた二人の師匠。

—約60年前から棋士として活躍されていて、令和4年に引退するまでは最年長棋士だったわけですが、棋士になったのはどのような

「桐山清澄九段の懸賞次の一手」は、日本将棋連盟から出題。



将棋界には童王や名人など8つのタイトルがあり、桐山さんは棋王と棋聖を獲得。

持ちはなかったんですけど、小学校3年生の時に、升田幸三先生という棋士との出会いがあり、プロの世界に入るようになりました」

—実力制第四代名人の！ そんな棋士の目に通うなんて、その頃からやっぱりすごかったんですね。どのように出会われたのですか？

「生まれ育った奈良県吉野郡下市町の隣町が升田先生の奥様の故郷でして、避暑でご夫婦で近所の旅館にいられた時に、私を先生に紹介して下さい方がいて、一局指させていただきました。そうしたら、両親にプロになる気があるのなら、内弟子にしても良いというお話があったそうです」

—まだ小さいのにすごいですね。それで師匠が暮らす東京へ単身で行かれたわけですね？

「はい、一人で先生のお宅でお世話になりました。学校に行きながら養成機関に通ったり、町の道場へ行ったりしてました。将棋を指すのはすごく楽しいんですけど、学校で向こうの言葉になじみずホームシックになって。将棋は勝負の世界ですから、意気地がないと破門になってしまいました」

—それで故郷の下市町に帰ったわけですね。  
「それが、直接帰るのは恥ずかしいので、大阪に母親の妹夫婦が住んでいて、そこでお世話になって。大阪に将棋クラブがあったのでそこに1年間通いました。一生懸命将棋を指していた私を見て、父がなんとかしてやりたいと思ったんでしょうね。増田敏二先生を紹介してもらい、『そういうことなら弟子として取ってあげる』ということで再び首が繋がったんです」

### これから将棋を始める 子どもたちに託す思い。

—そこから棋士を目指すわけですね。プロになったのは何歳の時ですか？  
「養成機関で一つずつ段位が上がっていき、将棋界の場合は、四段からプロの棋士として認められるのですが、四段になったのは18歳の時です。年齢的には平均より早かったの

文化スポーツ振興事業団理事長として、「市民の方に喜ばれる催しをやっていきたい」

きっかけだったのでしょうか。  
「小さかったので記憶はおぼろげなんですけど、3歳の頃には祖父の手ほどきで将棋を指していたみたいです。近所で縁台将棋を大人がやっているのを見に行ったら、『僕、ちょっとやるか?』と言われて混ぜてもらったりしてたんですよ。まったくプロになるという気

将棋の戦法本など桐山さんが著者の本も多数あります。



ですが、この世界に入るのが早かったので、プロになるのにはずいぶんかかりましたね」

—そこから長く活躍され、通算勝利数996勝は歴代10位という素晴らしい戦績です。引退される前は、最年長棋士として活躍されていて、初めてのタイトル・棋王も高槻在住時に獲得されました。高槻に居を構えられたのはいつ頃ですか？  
「32歳の時です。引越す前は大阪市内におったんですけど、北摂がいいかなと思い、何軒か見た中でここに決めました。その時は高槻に将棋会館が来るなんてまったく思ってもいなかったんですけど(笑)」

—高槻がいいと思った決め手はなんだったんでしょう。  
「一番は静かなところですね。ここ日吉台は、当時はあたり一帯が開発されて10年ぐらいで、まだバスの本数も少なく空き地も所々ありましたから。今も変わらず静かですが、家で将棋の勉強などもしますので、騒々しい環境だとやっぱり集中できませんからね」

—ここにいられて45年が経つわけですが、その間に高槻は変わりましたか？  
「ずいぶん変わりましたね。私はこちらに来た時は、JR高槻駅も高架化されたばかりで、周りにタワーマンションなどの高いビルなんかほとんどなかったんで、すごく発展して驚きますね。それでもまだ少し郊外に行くに豊かな自然も残っているし、ここに住んでよかったと思っています」

—その成長著しい高槻に、[関西将棋会館]が移転してきました。将棋の世界で長く活躍されてきた桐山さんとしては、これから高槻の将棋がこうあってほしいという思いはありますか？  
「将棋に親しむ子どもが増えてほしいですね。今、小学1年生へ高槻の木を使った駒を配ってもらっているんで、そういうところから将棋に興味を持ってもらって、プロを目指す子どもが出てきたらうれしい。できれば高槻市出身のタイトルをとる棋士が出れば良いと願っています」







# 好きなヒト & スポット

01

スポット

TAKATSUKI NA SPOT

## 清鶴酒造の富田漬

富田町

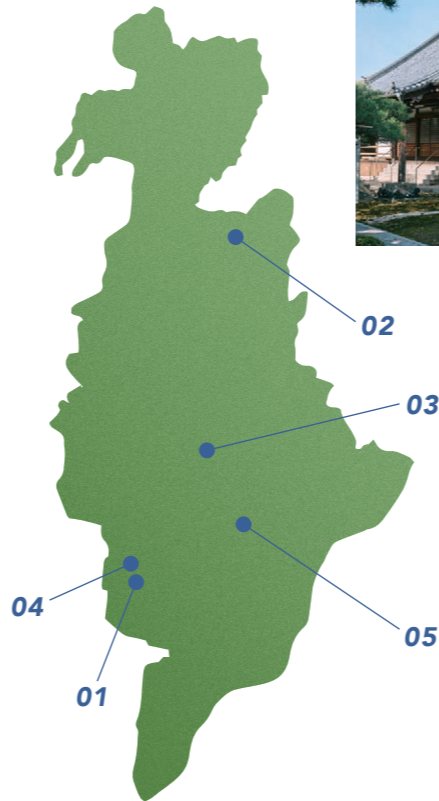
徳川家康も食したと言われるシャキシャキ食感の漬物。

「高槻に名物のお漬物があるというのを知って、1回食べてみよう。食べてみると一般的な奈良漬よりもあっさりとしておいしかった。それから時々買ってきては、ごはんと一緒に食べています」。桐山さんのお気に入り「清鶴酒造」の富田漬。なにわの伝統野菜にも認証されている地元の服部越瓜(しろうり)を酒粕で漬けたものです。越瓜が採れた日の朝にすぐ水に入れアクを取り、翌日から2〜3週間ぐらいで“漬け止め”。漬け込みすぎずシャキシャキの食感で口福に。



富田漬は江戸幕府に献上された記録が残り、將軍や大名をはじめとして全国に名がとどろいていた。

本堂にある中村孫四郎作『ドンキホーテ・騎士』。



04

ヒト

TAKATSUKI NA HITO

清蓮寺

## 足立元明さん

富田町

高槻で活躍した画家の作品も所蔵する美しい寺の住職。

「大晦日の除夜の鐘は、毎年突かせてもらっているんですよ。子どもや孫が生まれた時、地藏盆で名前入りの提灯を吊ってもらいました。足立さんは、大阪府立大学で工学を教えられていて、お話を聞いていると、いろいろ参考になることが多いですね」。桐山さんとゆかりのあるこのお寺は、天正12(1584)年の開山。美しい庭には高槻の古木に指定された黒松があり、お堂には高槻を基盤に昭和初期に活躍した画家、中村孫四郎の作品が掲げられていて、芸術的な薫りも漂わせています。



02

スポット

TAKATSUKI NA SPOT

## ポンポン山

高槻市と京都市をまたぐ市内最高峰でハイキング。

高槻市と京都市西京区境界に位置し、標高678.7mの高槻市最高峰。山頂で足踏みをするポンポンと音がすることから、その名がついたとも言われ、長く高槻で暮らしている人は、実際に足踏みした人も多いのでは？ 桐山さんは健康のことを考えて、何度か登ったことがあるそうで、「そんな高い山は登れないんですけど(笑)、自然の中を歩くのは変化があって好きなんです。高槻市営バスで神峰山口まで行って、そこから登り始め、神峯山寺、本山寺を通過して歩きました。ゆるやかな山道が続いて歩きやすいのがいいですね」



03

スポット

TAKATSUKI NA SPOT

## 自宅近くの散歩道

宮が谷町

歩道が広く、安全で歩きやすい新しい道。

現役時代に家で将棋のことを考えて行き詰まった時、気分転換に家の近くを散歩していたという桐山さん。みやこ保育園やいかりスーパーマーケット、マクドナルドが面する交差点から名神高速道路高槻インターチェンジ方面へと下っていく坂道を、一時は毎日のように歩いていたそうです。「平成30年に高槻インターチェンジが開通した時に新しくできた広い道です。車道、自転車道、歩道にハッキリと分かれていて結構広く、坂の傾斜もゆるやかなので、すごく歩きやすい歩道なんです」と桐山さん。

05

スポット

TAKATSUKI NA SPOT

## 高槻城公園芸術文化劇場

野見町

令和5年に南館がオープンした高槻の文化発信拠点。

高槻市文化スポーツ振興事業団理事長を務める桐山さんにとって、市の文化を発信していくための大切な場所。「南館にあるトリシマホールや太陽ファルマテックホールでは、音楽や演劇をはじめとするさまざまな催しが行われ、とても活発に利用されています。オープンした年の5月には、将棋界のタイトルの中でも最も歴史がある名人戦が開催されて盛り上がりました」と桐山さん。かつての高槻現代劇場も北館として活用されています。